

「集談会への積極的取り組み」

そして昭和五十五年四月、子どものカブスカウト卒業と同時に、今度はもう一度、真剣に集談会に出るようになりました。S集談会に再び出席してみると、三年足らずのブランクの間に、当時から継続して参加していたかたがたの進歩の著しいのに驚きました。自分も、もっとしっかりした生き方を身につけたいと思い、月一回の集談会には必ず出席する誓いをたてました。そして少しでもお役に立つことは、積極的にさせていただけようにと心がけました。

また永年希望していた学習会受講は、昭和五十五年九月から十二月にかけての、基準型学習会受講で、かなえられました。学習会参加の動機として、雑草のような生命力と大人の知恵を身に付け伸ばしたいなどと記したものでした。基準型学習会は期待にたがわず、素晴らしいものでした。

長いつらい苦勞の連続をこやしとして、飄々とユーモアにかえて、わかりやすく話され、何でも受け入れてもらえそうな、発見会大先輩Y理事。同年代のサラリーマンとして、私の考えがまだ甘いことを指摘され、その内容は大変厳しい指摘でありながら、反発させず、恥をかかせず上手に指導して下さったT前理事補佐。部下や後輩の指導の仕方には、こんな方法もあったかと、あやかりたいと思つたものでした。また、気軽に腰軽くお世話下さる世話人のかたがた。若いのにしっかりした生き方をつかんでおられることが、学習会日誌に残されているI前理事補佐の日記等々。講義内容だけでなく、周辺のいろいろな面においても、良いことをたくさん見聞きすることができ、素晴らしい先輩や仲間がいっぱいいて、啓発されるどころ、まことに大きいものがありました。

そして、この学習会の日記指導を通力で、H理事やT前理事補佐から、私が心配していた仕事面での現実からの逃避は、むしろ余りみとめられず、逆に、自分としては快適な家庭生活の面で、甘えと、かなりの気分本位があることを指摘され、それ以後の実践課題として注意しています。

(続)